「核を巡る三部作」を振り返って

鎌仲ひとみ 映画監督

皆さん、長い映画を最後まで見てくださってありがとうございました。次は2月16日から1週間、渋谷のオーディトリウムという劇場での公開が決まりました。実は、「東日本大震災」が起こった2011年3月11日に、まさにその劇場でこの映画を公開していたのです。

午前中の上映では、私の映画の観客としては非常に珍しいタイプのスーツをバシッとキメた紳士が来てくださって、映画の後感想を聞いたら、「自分たちは原発をつくるエンジニアだけれども、もう日本には原発はいらないと思うんだよ」ということをおっしゃっていたんですね。時代はちょっと変わっていくのかもしれないと思っていた、その2回目の上映の最中に地震が来てしまって、日本は原発が爆発した国になってしまったんです。

今日の映画は、核をめぐる私の三部作の三本目なんですけれども、私がこの映画をつくってきた、その経緯といったことをお話しします。

――イラクとフクシマ

最初は、『ヒバクシャ――世界の終わりに』という映画をつくりました。これは2003年に完成した作品です。私はこの作品で映画の世界に入ったのですが、以前は映画だけではどうしても食べていけないということで、フリーの映像作家としてNHKの番組づくりをしていました。ドキュメンタリー映画の場合、今日のように観客に直接お届けするのはとても難しかったんです。劇場でドキュメンタリー映画を上映するようになったのはつい最近のことなので、自分がつくった作品をどうやって人に見てもらうかということが、すごく大きな壁でした。

NHKの番組はドキュメンタリー映画と違って、電波に乗せてくれるんです。私はつくりたいものがたくさんあるので、映画制作だけにこだわらずにNHKで

番組をつくろうというように意識を転換しました。結構、順調にいっているつもりだったんですけど、1998年にイラクに取材にいったときのことです。イラクでは、サッカーをして遊んでいる子どもたちが、遊んでいるだけで放射線で被ばくするのです。日常生活の中で被ばくが起きているという、そういうことに初めて遭遇しました。

劣化ウラン弾が炸裂した砂漠で遊ぶ、イラクの子どもたち（『ヒバクシャ』より）

それまで私自身、被ばくに関してまったく知識も関心もありませんでした。広島と長崎に落とされたような原爆が、二度と人類の手によって使われることはないだろうと勝手に決め込んでいたんです。だから、原爆が使われなければ被ばく者も生まれないという思い込みがあったのです。ところが、イラクに行きますと、子どもたちがサッカーをして遊ぶだけで被ばくするという事態があって、その原因は劣化ウラン弾だったんです。砂漠にごろごろと転がっておりまして、これを放射線計測機で測ると、3.8マイクロシーベルト毎時。これは年間にすると、33ミリシーベルトの被ばくになります。たいへんな線量の被ばくです。

劣化ウラン弾というのはどういうものかというと、これが戦車に当たると燃えるんです。火薬も何も入ってないのに、ウラン238というんですが、ウランが3000度ぐらいで燃えて、一瞬で40センチもある戦車の鋼鉄の装甲をぶち抜くんですね。これはアメリカが80年代の初頭ぐらいから開発して、アメリカ軍が1991年に湾岸戦争で世界で初めて戦闘で使ったという代物なんです。それが燃えたときに放射能を含んだ微粒子になって、それが環境中に拡散していって、生態系の中に入り、食べ物や空気や水から体の中に少しずつ入っていく。

こうして慢性的な低線量の内部被ばくが、イラクで進行していたんです。私はそんなことを聞いたことがなかったので、戦争が終わって7年も経っているのに、なんで子どもたちは今病気になるのだろうかと、わけがわかりませんでした。

フクシマ原発事故のあと、福島市の渡利（わたり）というところには、ホットスポットがたくさんあります。ここが、4〜6マイクロシーベルト毎時、つまり劣化ウラン弾に汚染されたイラクよりも高い放射線を、そこにいるだけで浴びてしまうというホットスポットが点在しているんです。ところが、こういう地域が、まったく避難勧告を受けていないんですね。ほったらかしになっていて、子どもたちがここでサッカーをしたりしています。渡利小学校のプールで3.9マイクロシーベルト毎時、駐車場では70マイクロシーベルト毎時、角の方は100マイクロシーベルト毎時と、とんでもなく汚染されている地域なんです。

イラクでは、小児がんと小児白血病が増え続けているんです。それだけではな

く、ありとあらゆる病気が増えています。問題は、その因果関係を劣化ウラン弾のせいだと特定するのがすごく難しいということなんです。

イラクの取材で私は被ばくという問題に初めてぶつかりました。そして、小児がん、小児白血病のこの子どもたちが治療されないままに放置されていました。取材した当時は経済制裁があって、イラクに抗がん剤を輸出してはいけないということになっていました。新しい医療情報も教えてはいけないと。だから子どもたちは、つぎつぎ死んでいくしかないという状況に追いやられていたんです。それを私が、当時バグダッドにありました国連の WHO（世界保健機関）の事務所に訪ねていって、「なぜなんだ」と聞いても、ここの人たちは、大統領のサダム・フセインが「抗がん剤で大量破壊兵器をつくるかもしれない」などという、バカなことを言っていたのです。

でも現実に、子どもたちは死んでいきます。私はカメラを持ってそれを撮影しました。なにもかもすごく無力なんです。お医者さんも無力だし、病気の子どもを抱えたお母さんたちも無力なんです。世界中がイラクの子どもたちなんか死んだっていいというように、見捨てられているっていう感じなんですね。まさしく、そういう絶望の中にいたと思います。

翻って、今、ここに暮らしている福島の子どもたちやその親たちをみると、まだ 1 年と 9 か月ですが、病気が出ているって話、私のところにポロポロと来ます。今日も、子どもが小児白血病になったという知らせをいただきました。でも、それがこの福島原発事故のせいだと言っても、やっぱりそれは、因果関係がどうだとか、認めてもらえないのではないでしょうか。

今回メルトダウンした原発の、炉心に入っている核燃料は放射性物質を大量に含んでいます。イラクの場合は劣化ウランだけですが、原発の場合は、何百種類もの、さまざまな放射性物質ができています。1 年 3 か月ぐらい核分裂反応をさせ続けると、ウランがいろいろな人工的な放射性物質に変わっています。プルトニウムや放射性ヨウ素や放射性セシウムなど、いろんな放射性物質ができます。それが爆発によって放出され、さらにその後も日常的に漏れているのです。イラクよりも厄介なことが起きているのです。

── 低線量内部被ばくと病気の因果関係

劣化ウラン弾の問題に戻ります。これは原発の核燃料をつくるときに出てくるゴミからつくっているんです。そういうことも、私は 1998 年に取材に行った当時は知りませんでした。これは一体何がおきているんだという私の驚愕を NHK の番組で伝えようとしたのですが、NHK の高い教育を受けたプロデューサーたちでさえ、このような低線量の内部被ばくは無害だというふうに信じていたんです。「だって微量で、放射線が弱いんだろう。影響がないとアメリカは言ってい

るじゃないか」と。子どもたちの病気と劣化ウラン弾の因果関係について、アメリカは公式に否定しているんです。

『ヒバクシャ』に登場するイラクの子ども

ところがイラク戦争には多国籍軍が参戦したので、ヨーロッパからもイタリア兵とかスペイン兵とかイギリス兵がイラクに行きました。その人たちが帰ってきて、湾岸戦争症候群を発症します。もちろん、アメリカの兵士たちも多数なっているわけですけれども、ヨーロッパではそれをもっと真剣に受け止めて、何故こんな病気が出てきたのかと追究していった結果、やっぱり劣化ウラン弾ではないかということが、だんだん確定されつつあります。これを訴えたイギリスの兵士は裁判では勝っています。でもアメリカではまったくそうなっていない。ですから、この低線量の内部被ばくが人間にどんな影響を与えるのかは大きなグレーゾーンの中にあるのです。

私はイラクに行ったとき、「こんな大したことない放射能汚染なんだから」と言われましたが、バグダッドやバスラやあちこちで空間の放射線量を実際に測りました。ところがいま比較してみるとフクシマ原発事故が起きた3月時点の東京よりも確実に低い、ずっと低い、今の東京よりも低いくらいの放射線量しかイラクにはないんです。

現在の日本は東日本を中心にして空間の放射線量がものすごく高くなってしまったわけです。ほんとうにこれから何が起きるかわかりません。だから、この低線量の内部被ばくは、いま私たちがほんとうに考えて、向き合って、知らなきゃいけない重要なテーマだと思っています。

私は1998年にNHKの番組をつくろうとしたときに、そこにもう一つ、メディアの大きな壁が立ちふさがっているということに気がつきました。ほんとうは原発というのは、爆発しなくても煙突から希ガスという放射性物質を出しています。ドイツの疫学調査では、原発を中心にして、10キロ圏内、100キロ圏内の小児白血病の発症率は、それ以外の地域よりも確実に高いという結果もあります。アメリカの低線量被ばくの危険性に警鐘を鳴らした非常に貴重な研究者も、乳がんの発症率を原発周辺で調査して、やはり原発の周辺だけが高いという事実に行きあたっています。ですから、原発が爆発してこういうことになった今、低線量の内部被ばくは私たちにとって避けがたい問題だと思っています。

―― どれくらい？　が問題

だけどやっぱり原子力を進めたい、核開発をしたい、という大きな勢力は、莫

大な予算と権力を使って、組織的に被害の過小評価を宣伝してきました。それは、広島と長崎に関しても、同じでした。「唯一の被ばく国」といわれながら、この大事なことがなぜ抜け落ちてしまったのだろうと思うのです。その大事なことというのは、たとえば、その原爆が投下された1945年8月6日、8月9日、それから5年間、アメリカの占領軍は広島、長崎の生き延びた被ばく者たちに、自分の体験を一切語るなと命じました。診察したお医者さんに対しても、診察して何か異常があったり、気がついたことを一切他人に語ってはいけないという、厳重な言論統制をしきました。放射線にやられた弱い人たちは、その5年間に亡くなっていったのですね。

その5年後に、今度は原爆障害調査委員会（ABCC）というのを出して、生き残った8万9千人ぐらいの被爆者の方たちを、治療はせずに血液検査をしたりいろんな検査をして取ったデータが、今、国際放射線防護委員会（ICRP）の安全基準値の元データになっているんですね。その元データには、内部被ばくは、アルファ線もベータ線の影響も一切入っていません。ドカンと原爆が爆発したときに出てきた放射線の量だけを計算して、しかも、その後5年間に死んだ人のデータを一切入れずにつくったのが、今の安全基準値なのです。それも根本から問い直されなければいけないのです。

ところが今、日本で横行している、フクシマ原発事故後に「これぐらい大丈夫、あれぐらい大丈夫」と言っているのは、まさしく根本がずれているこの国際放射線防護委員会の勧告を元にしているのです。だから、私はこれをちゃぶ台返しと言うんですけど、その国際放射線防護委員会ですら、年間1ミリシーベルト以上浴びてはいけない、極力少なくしろと言っているところを、「100ミリ浴びても大丈夫」という人たちがいるんです。今、非常事態だからということで、福島では20ミリ。その前は、福島県立医大の山下俊一教授は100ミリ浴びても大丈夫などと言っているわけですから、日本はとんでもないことをやっているのです。

そのとんでもなさが、なぜか国民の中に共有されていないのですね。ここは私たちが乗り越えなきゃならない大きな壁だと思っています。私が映画をつくり始めたモチベーションは、被ばく問題なんです。被ばくをしたら真っ先に子どもたちが死んでいくということです。胎児であり、乳幼児であり、そして小さい子どもの順番にやられていく。これでは未来がないと思ったのです。

NHKで番組を放送するにあたってすったもんだもありましたが、なんとか放送はできました。被ばくに関する私の突っ込みがちょっと浅かったこともあると思いますが、でも、イラクの子どもたちが亡くなっていっていることや、薬がないことや、劣化ウラン弾が使われたことなどは入れることができました。その番組を600万人が見てくれたんですけど、ほとんどリアクションがありませんでした。シーンとしていて、テレビというメディアは、ちょっと駄目だなと私は思いました。だから、今日のようにこうやって来ていただいて、向き合うことので

きる映画に切り替えることになったんです。スクリーンに向き合っていただくことによって、顔が見える中でこういうことは伝わっていくんだろうなと思って始めたのです。

私に被ばくのことを教えてくれたのは、肥田舜太郎さんという方で、今年の1月1日で96歳になりましたが、1年に100回ぐらい講演会をしていらして、頭はすごくお元気な方です。広島で被ばくなさったんです。原爆が落とされたあとに広島に入り、原爆に直接にあっていない人たちも被爆者と同じ症状を出して苦しんでいるということを、人類史上最初に体験したお医者さんです。それで、内部被ばくにずっと警鐘を鳴らし続けてこられました。私はイラクから帰ってきて、この肥田先生に会ったことで被ばくに関して目が開かれました。被ばくは侮れない。被ばくは過去のことではない。現在進行形で、世界中で起きている。それは原子力の周辺で起きているということだったんです。

アメリカの核兵器をつくっている工場の被ばく者を取材しました。核兵器工場の風下で、ローラさんという方は結婚して新婚生活を始めたのですが、彼女が住んでいる地域の28家族全世帯でそこに住んでいる女性全員が流産をし、障害児が何人も生まれて、一家に何人もがん患者が出るというようなことになりました。実はその核兵器工場から放射性物質が故意にばらまかれていたということが、機密書類からわかったのです。おかしいなと思いながらも、日々の生活に追われて、放射能のせいだとは気がつかなかった。気がついたときにはもうすでに深刻な被害が出ていたのです。

その核兵器工場を支えてきた科学者にもインタビューをしました。彼は、「そういう被害があるという話もあるけれど、データではそんなことはない」と言います。「データがすべてだ」と言うんですね。でも、私はそのデータにこそ問題があると考えています。

フクシマでも起きていることだと思いますが、放射能汚染というのはまだらです。筆にインクを含ませてバーッと振ると、まだらの点々と白い部分ができる。インクがかかったところは濃いですね。でも、大雑把な調査データを平均化してしまうと、あまり変わらないじゃないか。ほら、被害はないじゃないかというようになってしまうのです。

どれだけ被ばくしたのか、その数字を出しなさいと言われても、実際、それはいまだにわからないのです。チェルノブイリの人たちもそうです。どれだけ被ばくしたのかなんてまったくわかってないのです。わかっているのは、広島、長崎の原爆が爆発したときにどれだけ放射線が出て、外からどれだけ浴びたのかというのは、計算上はわかりました。だから、広島・長崎の8万9千人の人たちのデータが元になっているんですね。

わからないことを安全だ、あるいは危険だと言っても、そこがこの問題を非常に厄介なことにしている原因です。しかし、現場に行くと被害者がいるというの

が現実です。被害を受けている人たちが確実にいて、ローラさんも近所の人たちのように、自分自身も含めて家族の一人を除く全員ががんになっていたり、自分も流産を経験したりしているんです。こういうことを肥田先生は「自覚のない被ばく者」と呼んでいます。

今、被ばくのこととか放射能のことをフクシマも含めてあちこちで話をしますと、「あなたはちょっと神経質なんじゃないの」とか、「危険をあおるんじゃない」ということをしばしば言われますが、無自覚であろうが自覚的であろうが、汚染地に住んでいれば被ばくすることに違いはありません。

被ばくには加害と被害の区別がもうあまりありません。つまり、加害者も被ばくから免れることができないのです。だから、60 万人のアメリカ軍の兵士たちがイラクに侵攻して劣化ウラン弾をバンバン撃ち込んだら、彼らも被ばくするのです。このまま劣化ウラン弾を使い続けたり、原発をつくり続けることによって放射性廃棄物がどんどんたまっていき、さらにそれを再処理することによって、六ヶ所村をはじめいっそうの放射能汚染が起きることになります。

そうなると、一番犠牲になるのは、また子どもたちです。子どもを被ばくさせないためにどうしたらいいのかを突き詰めていくと、やっぱり原発はやめたほうがいいんじゃないのかと、そう思うに至るのですね。

――『六ヶ所村ラプソディー』の制作

今回のように人類史上初めて複数の原発がメルトダウンして、複数の建屋が爆発しても、日本は原発推進をまだやめようとしません。即時やめようといわない。ほかの国々では、はっきり国としてやめようと、ドイツ、イタリア、スイスとか、インドネシアも「原発を日本から輸入しようと思っていたけど、うちには合わない」と言ったりとか、そうなってきているのに、日本はなかなか足が洗えない。それはやっぱり、技術的な問題ではありません。いろんな問題をはらんで、そこにある。私たちもずっとその電気を使って、使用済み核燃料という放射性廃棄物を無自覚に出してきたということがあります。

私は 2006 年に、映画『六ヶ所村ラプソディー』をつくりました。日本中の原発から、すべての核廃棄物が青森県六ヶ所村に集まってくるのです。その村で、1 万 2 千人の村人の中で反対しているのは数人しかいないのです。その中で、今日は菊川慶子さんという方がつくったルバーブジャムを持ってきました。菊川慶子さんは自分のふるさとにチューリップ畑をつくって、再処理工場をつくることや、それを稼働させることや、あるいは自分の村が放射性廃棄物の集積場になるということにずっと反対を表明して、原発もやめようということを生涯をかけて言い続けてきたのです。けれども、村の中では孤軍奮闘、非常な少数派なんです。

そういう、とても厳しい中で孤立した闘いをやり続けている、その困難といっ

たらそれは大変で、私は2年かけて通って映画をつくったのですけれども、どうしてそんな頑張れるんだろうか、人生をかけるぐらいに一体何が菊川さんを動かしているのだろうか、このことを映画の中で描かなければいけないと思って、何度も聞いたんです。「どうしてっ？」て。特別な理由があるんじゃないかと私は思い込んでいたのですが、菊川さんがいつも答えるのは、「ふるさとを放射能に汚染されたくないから」。「えっ、ただそれだけ」と、当時私は思ったんですよ。「えっ、ただそれだけで頑張れるんですか」と。

六ヶ所村の菊川慶子さん（『六ヶ所村ラプソディー』より）

だけど、今こうやって福島を中心にし、そこに住んでいた人たちが、実際に自分のふるさとがものすごく放射能で汚染されたという状況が、具体的に、本当に起きました。それはどういうことなのか。私は今、福島を取材して新作映画『内部被ばくを生き抜く』をつくっているんですけども、その福島の人たちが認めたくないって言うんですよ。

すごい大きなおうちに住んでいるんです。広い敷地があって、そこに家庭菜園のような畑があったり、あるいは別のところに畑があったり、その裏にすぐ山があって、その山には山菜が春にはモリモリ出たりとか、庭にもフキが出たりとか、いろんなものが生えて、それを季節になると摘み取って、シュワーって天ぷらにして食べたり、酒のさかなにするんです。ちょっと川に行って魚を釣ってきて、それをみんなでバーベキューするとか。そういうことを当たり前のようにやってきたのに、放射性物質に汚染されてしまった。そうすると、もう100ベクレル超えていますとか、コシアブラというおいしい山菜が800ベクレルとか。そこに見える山菜とかふきのとうとか、見た目はみんな綺麗なまんまなんです。

そうすると、このような豊かな暮らしを持っていたその福島の人たちは、私の内部被ばくの話を聞いても「そんなことを認めたくない」と言うんです。「だって、汚染されてるでしょう」って私は心の中で思うのですけれども、それが言えないんです。「汚染されていることはわかっているけど、でも、そんなことは認めたくねえんだ」って。「俺たちの暮らしが何もかも汚染されて、前のように戻らないなんて、やっぱりそれを認めたくない」という人がとても多いんです。そういう微妙な気持ちというのが、たとえば、除染とかあるいは子どもを避難させるとか、そういうことに影響を与えているんですね。

ふるさとが放射能に汚染されるということの内実というのは、これからもっと出てくると思います。そういう思いをして頑張っている人たちが、いかに世間一般の人たちから、変わり者とか過激派とか共産党とかって言われて理解されてこ

なかったか。今もあまり理解されてないのではないか。そこをどうしたらいいんだろうと思います。

一方、六ヶ所村の岡山勝廣さんの話もあります。菊川さんと中学校の同級生で、六ヶ所村の最大企業の会長で、推進派のトップです。それで、村の子どもたちの未来のために再処理工場は必要だと言います。菊川さんは、子どもたちの未来のために必要ではないと言うんですね。

再処理工場はある、ウラン濃縮工場はある、低レベル放射性廃棄物施設はあるという核複合施設（核燃料サイクル基地）。そういう巨大な核施設を2兆5千億円というお金をつぎ込んで、日本の国家と経済界が寄ってたかって人口1万2千人の六ヶ所村につくるというのです。2兆5千億円のお金が流れ込むということで、村はすったもんだしたのです。80年代からものすごい闘いがあって、そんな中で、推進派と反対派に分かれるということになってきたのです。

ここがちょっと考えどころです、皆さん。推進派と反対派とにわけているのは誰なのでしょう。結果としてそうなっているんですけれども、私の『六ヶ所村ラプソディー』の映画の中では、そういうのを全部取っ払って、先ほども言ったように、「もう加害者も被害者もないんですよ、核に関しては」と。これまで原発に反対する側に立ってきた人たちは、原発を推進する人たちに対して、「金で魂を売った」と罵ってきました。そういう立場で反対運動をするというのは、日本の一つの伝統的なちょっと古いタイプの反対運動で、自分たちに正義があるというわけです。

けれども、菊川さんの運動は、全然違う、独自の運動だと思います。足元から地場産業を起こす。つまり、再処理工場に落ちてくるような莫大なお金に頼らない。六ヶ所村の土地は寒冷地作物とか野菜とかに、向いています。そういうものをつくっていくことや、美しい自然の中でのグリーンツーリズムとか、もっといろんな可能性がある。それで生きていけるんじゃないかということを模索しています。村の人たちの事情もよくわかっています。つまり、再処理工場を受け入れさせられた経緯というものが、権力であり、お金であること。たとえば、漁業協同組合の組合長さんには、青森県の県庁から黒塗りの車で毎週お迎えが来て、温泉街に連れてって、官費で遊興させるんです。それは、電力会社がお金を出しているんですけど。

そうすると、それまで反対して駄目だと言っていた漁業協同組合の組合長さんが、酒と女に篭絡されていくんです。酒と女って、男の人は非常に弱いですね。いや、これはもうほんとうに昔っからの手管なんですけど、効果的だとあちこちで聞いています。

それでどうなるかといえば、家庭崩壊するんです。そして漁業協同組合の組織も崩壊していく。ずるずると取り込まれていく。そういう証言を私いっぱい聞いています。何も権力を持っていない、ふつうの人たちは、ただ巻き込まれていく

んです。六ヶ所村だっていろんな揉めごとがあっても漁業権を手放さないと頑張っていた人がいるにもかかわらず、機動隊が来て、その反対する漁師さんたちを押しつぶし、逮捕して……なんで逮捕するのかわけわからないんですけど、そういうことを田舎でされると、やっぱり非常に効くんですよね。

六ヶ所村の核燃料サイクル基地

反対運動がそうやって瓦解していったあとに、国が国策として乗り込んでくる。その核施設をドカンと持ってくるとなったときに、年寄りがいるとか、子どもがいるとか、病人を抱えているとか、そこで生計を立てていかなきゃならないとか、さまざまな事情を抱えた人たちが、サバイバルの段階に入ってくるんです。もう、選択の余地はありません。だから、生き延びていくために、経済が大事だと言うようになるのだと思います。サバイバルのためにはほかに選択肢がない、と思い込んでいるというところがあります。原発とか核施設を誘致するときの力というのはものすごいので、これをもらわなくちゃ損だと思わせるようなところは確かにあるんですね。

でも、反対派とか推進派というレッテルを全部はがして、何が起きているんだろう、人としてどういうふうに生きているかということを、六ヶ所村で見ていこうとしたんです。『六ヶ所村ラプソディー』を見たたくさんの人たちが、知らなかったって言うんです。自分たちがどんな電気を使っていて、その結果どうなっているのか。原発がどうなのかということにまったく興味もなく、知らなかった。知った今、何ができるのかというときに、脱原発のビジョンがほしい。そこで私は『ミツバチの羽音と地球の回転』をつくることにしたわけです。

―― スウェーデンと祝島

祝島とは出会いがありました。祝島を取材しようと思う前に、私はスウェーデンを取材しようと思っていました。ドイツでもいいし、スウェーデンでもいい、脱原発を果たした国を撮ろうと。でも、スウェーデンにしたのは、原発の是非を超えて、持続可能な社会とは一体どんな社会か、原発が良い悪いではなく、社会全体が持続可能になるためのエネルギーはどうしたらいいのかという、そういう大きなビジョンがある。しかも、その地域分散型の、そこの地域の人たちの手でエネルギーをつくるということをやっているという、そこがすごく気に入ったのです。

スウェーデンを見て、ついで祝島の取り組みを見ました。この二つが、映画を見てくださった皆さんの中でなにか化学変化を起こすということを期待している

のです。この二つを一本に入れるというのはかなりの荒業だったのですが、でもやっぱり、単なる風であり、単なる太陽の光だったものがエネルギーになる。資源のない国だと思っていたものが、実はその波の力はスウェーデンの3倍もあるということに気づく。新しいエネルギーを見るまなざしというものを、スウェーデンで見て日本に帰ってきたとき、なんでこんなことやっているんだ、なんでこの美しい海を埋め立てなきゃいけないんだと考え込むのです。ほかに何か道があるんじゃないか、別の道がもっと具体的に見えてくるんじゃないか。そういうことで、2年かけてつくったんです。

この3本はそれぞれ独立した作品なのですけれども、じつはひとつのつながりの中にあって、3本で1本と私は思っているのです。私がこの13年かけてこの3本の映画（『ヒバクシャ』2003年公開、『六ヶ所村ラプソディー』2006年公開、『ミツバチの羽音と地球の回転』2010年公開）をつくってきた中で、見えてきた世界というものが出ています。この映画は、未来のエネルギーを一体どうするのかという問いかけになっているんです。誰がそれをやるのかといったら、国とか電力会社とかに任せておけばいいということではありません。私たちがどうするのか、私たちが何ができるのかという、そこが一番問われているのです。

ということで、核をめぐるこの3部作を振り返って、つくってきた経緯をお話しいたしました。どうもありがとうございます。

［かまなか　ひとみ］